



技術動向分析から自社が取り組むべき技術開発テーマを提案する

技術動向分析から「次に攻めるべき技術テーマ」を出す用途にすぐ使えるのは、①Patentfield AIR、②PatSnap Eureka系のエージェント、③国産SaaS+汎用LLM連携ワークフローの3系統です。[\[1\]\[2\]\[3\]](#)
[\[4\]\[5\]\[6\]](#)

1. Patentfield AIR : 1万件スケールの一括AI分析

- 最大1万件までの特許集合を一括で生成AIにかけ、要約・キーワード抽出・トレンド把握を自動化できるオプションサービス。[\[2\]\[7\]\[6\]\[1\]](#)
- 技術トレンド分析（出願推移・キーワード頻度・分類ラベル付けなど）機能と組み合わせ、特定技術領域の「ホットスポット」と「手薄領域」を同時に可視化可能。[\[1\]\[2\]](#)
- 抽出したキーワードや課題・効果を元に、生成AIで新規用途や応用分野の仮説を列挙させ、そのまま再検索・深掘りに回せるため、「発散→収束」を同一基盤上で回しやすい。[\[2\]\[1\]](#)

● 事例イメージ（貴社で即実践レベル）

1. 「全固体電池×電解質材料」などのテーマで世界特許を1万件程度まで絞り込み。[\[1\]](#)
2. AIRの一括要約+キーワード抽出で、課題・効果・用途の頻出パターンと未出の組合せ候補を自動抽出。
3. 出願年推移・主要出願人・技術分類をPF既存ダッシュボードで確認し、「競合がまだ厚くないが成長カーブが立ち上がり始めた用途」を重点テーマとして提示。[\[2\]\[1\]](#)

2. PatSnap Eureka / Eureka Scout系 : 自律スカウティング+クラスタリング

- R&D特化の特許・論文検索にAI Q&Aを組み合わせ、技術ソリューション提案や技術トピックごとのモニタリングを行うツール群。^{[3][4]}
- 技術トピック／企業ごとのアラートやダッシュボードにより、時間軸の変化（新規プレイヤー、急増クラスターなど）を追いながら「今後厚くなりそうな技術ドメイン」を抽出可能。^{[4][3]}
- AIテックQ&Aにテーマを入力すると、関連特許群から複数の解決策・応用アイデアを生成し、その根拠特許も同時提示するため、仮説テーマをその場でエビデンス付きにできる。^[3]

● 事例イメージ

1. 「CO2電解還元触媒・電極構造」というテーマでエージェントに探索させ、クラスター／マップで主要技術コンセプトを俯瞰。^{[4][3]}
2. 急増クラスター（例：ナノ多孔質構造×特定金属）を抽出し、「自社材料技術と掛け合わせた場合の新規用途」をAI Q&Aにプレストさせる。^{[3][4]}
3. 有望な組合せについては、同一ツール上で先行技術の詳細を読み込み、研究テーマ候補（ターゲット用途＋要素技術＋想定顧客）として整理。

3. 生成AI×特許DBの二段階アプローチ（旭化成・コニカミノルタ型）

- 日本企業では、①発散フェーズ：生成AIにテーマ領域のデータを与えて新規用途・アイデアを幅広く生成させ、②収束フェーズ：特許・論文DBを用いてエビデンスのあるテーマに絞り込む、という二段階運用が実務で定着しつつある。^{[8][9][10][5]}
- 発散フェーズでは、汎用LLM（ChatGPT、Claudeなど）に、社内技術資料や代表特許の要約群を投げて、「用途軸」「顧客課題軸」「規制・社会課題軸」などでテーマ候補を列挙させる使い方が多い。^{[10][8]}
- 収束フェーズでは、PatentfieldやPatSnap Eureka、その他専用DBのトレンド分析・パテントマップ自動生成機能を使って、テーマごとの出願件数推移・主要プレイヤー・ホワイトスペースを可視化し、研究テーマ案を優先付けしている。^{[9][5][1][3]}

● 事例イメージ

- 旭化成・コニカミノルタなどでは、この「生成AIで候補発散 → 特許・論文DBで検証・選別」という流れで、既存事業から離れた新規用途候補（異業種応用など）を発掘する事例が報告されている。^{[8][10]}

4. 他に検討価値のある国産／周辺ツール

- AI×パテントマップ自動生成サービス：特許出願先・時期・件数などを軸にしたパテントマップをAIで自動作成し、研究開発が活発な時期・企業を一覧するソリューションが登場しており、トレンド把握からのテーマ抽出に有効。^{[5][9]}
- 「生成AI×特許分析」特化SaaS：国内では、ポートフォリオ可視化・ギャップ発見・IPランドスケープ自動生成といった用途に特化した新サービスが2024-2025年にかけて増加しており、自社の既存IPランドスケープPJに組み込みやすい。^{[10][8]}

5. ツール別の使いどころ整理

ツール・方式	主な得意領域	具体的な使いどころ例
Patentfield AIR	大量特許の一括要約・キーワード抽出・トレンド分析	既知技術領域の網羅調査から、ホワイトスペース・新用途候補抽出 ^{[1][2][6]}
PatSnap Eureka / Eureka エージェント	技術Q&A、クラスター視覚化、技術・企業モニタリング	注目トピックの継続スカウティングと、テーマ候補のエビデンス付け ^{[3][4]}
旭化成・コニカミノルタ型2段階運用	発散：生成AIプレスト、収束：特許・論文DBで検証	新規事業・新用途探索の社内標準プロセス構築 ^{[8][10][5]}
AIパテントマップ系サービス	出願件数・出願先・時間推移の自動マッピング	成長領域とレッドオーシャン領域の切り分け、テーマ絞り込み ^{[9][5]}

このあたりを組み合わせ、「発散フェーズは汎用LLM＋社内資料／代表特許」「収束フェーズはPatentfield AIRやPatSnap等で証拠付き検証」という運用をテンプレ化しておく、「技術動向分析から自社の開発テーマを機械的に出す」ワークフローを、かなり即戦力レベルで回せると思います。^{[8][10]}

[1][3]

*
**

Patentfield AIRとPatSnap Eurekaのコストパフォーマンス比較

ざっくり言うと、「同じ“技術動向からテーマ出し”用途」で見ると、月額コストはPatentfield AIRが一桁安く、機能レンジとデータ量・AI性能はPatSnap Eurekaが大きい、という構図になります。^{[16][17][18][19][20][21][22]}

料金レンジの比較（目安）

項目	Patentfield AIR	PatSnap Eureka
基本プラットフォーム	Patentfield Mini：1IDあたり月額2～3万円台程度、Corpは5IDで月額3万円など。 ^{[19][23][24][22]}	PatSnap検索・分析一式で月額10万円程度～のエンタープライズ価格帯とされる。 ^[25]
生成AI/エージェント部分	生成AI調査・分析オプション「Patentfield AIR」：1IDあたり月額3万円～。 ^{[19][20][21][26][27][2]}	Eurekaエージェント群：公表価格は少ないが、製品情報では価格帯50～100万円クラス（導入一式）と案内されている。 ^[18]
想定導入規模	国内の小～中規模IP/R&Dチームでも手が届く水準（Miniプラン+AIRで合計月数万円レベル）。 ^{[19][20][24][22]}	グローバルR&Dや大企業知財部向けのエンタープライズ投資（年数百万円～を前提とするケースが多い）。 ^{[25][16][17][18][28][29]}

機能・性能の方向性

- Patentfield AIR

- 既存のPatentfield検索・可視化（トレンドグラフ、出願人分析など）に、「一括生成AI分析」を載せるオプションという位置付け。[\[19\]\[20\]\[21\]\[22\]](#)
 - 1万件規模の特許セット要約・キーワード抽出・技術トレンド検出を、比較的lowコストで回せるのが**強み**。[\[21\]\[22\]](#)
 - モデルは外部LLM（ChatGPT/Gemini/Claude等）のAPIも選択可能で、ユーザーAPIキー利用プランもあるため、トークンコスト最適化もしやすい。[\[30\]\[26\]\[27\]\[21\]](#)
- PatSnap Eureka
 - 特許・論文・材料・ライフサイエンス等、巨大な専用データを学習させた垂直特化LLM+RAGで、調査精度や新規性チェック性能を前面に出すプロダクト。[\[31\]\[25\]\[32\]\[17\]\[18\]\[28\]\[29\]\[16\]](#)
 - ベンチマーク（PatentBench等）では汎用LLMに対し、先行技術検出などで大きな精度差があるとされ、調査支援AIとしての**性能**に投資するプロダクトという位置付け。[\[25\]\[17\]\[18\]\[31\]](#)

コストパフォーマンスの見立て

- 「予算月数万円～、主用途は技術動向把握とテーマ候補抽出」
 - Patentfield+Patentfield AIRがコストパフォーマンス高め。既存のトレンド分析・パテントマップ+一括AI要約で、IPランドスケープ～テーマ案出しまで一通り回せるため、「国内中堅～部門単位のR&D/知財」で導入しやすい印象です。[\[20\]\[24\]\[22\]\[19\]\[21\]](#)
- 「年数百万円規模でも、精度の高い新規性調査・FTO・材料/創薬系まで含むグローバルR&D支援を一括でやりたい」
 - PatSnap Eurekaの方が、エージェントの充実・専門データ量・実務ベンチマーク実績という面で投資対効果を出しやすい可能性が高いです。[\[32\]\[17\]\[18\]\[28\]\[29\]\[31\]\[25\]\[16\]](#)

戦略的な使い分けの例

- 「技術動向分析から自社テーマを出す」が主目的で、既に他の検索基盤がある場合

- 最低構成：Patentfield AIRを“AI発散エンジン”として追加し、テーマ候補出し～トレンドの定量検証までを安価に構築。[\[22\]\[19\]\[20\]\[21\]](#)
- 「グローバル拠点横断で、ノベリティチェック・アイデア創出・材料探索まで一気通貫で標準化したい場合」
 - PatSnap Eurekaを“R&D横断インフラ”として導入し、費用対効果は「削減できた調査工数+回避できたリスク+得られた追加案件数」で評価するのが現実的な見積りになると思います。[\[17\]\[18\]\[28\]\[29\]\[25\]\[32\]\[16\]](#)

「技術動向→テーマ提案」だけを切り出してコスパ評価するなら、まずはPatentfield AIR+既存汎用LLM（社内）でワークフローを回し、PatSnap Eurekaは「より上位のR&D/知財基盤」として別レイヤーで検討する、という組み合わせがバランスが良いと思います。[\[18\]\[16\]\[17\]\[19\]\[20\]\[21\]\[22\]](#)

**

Patentfield AIRの1万件分析と生成AIモデルによる精度差の検証結果

公開情報ベースでは、「1万件分析の実測ベンチ」と「LLMごとの精度比較結果」がきちんと数値で開示されているのは一部のみで、主に①処理性能（件数・スピード）、②工数削減効果、③モデル選択肢という観点で概要が示されています。[\[41\]\[42\]\[43\]\[44\]](#)

1. 1万件分析まわりの仕様と実績

- 最大母集団
 - AIRは「最大1万件の国内外の検索母集団」に対して、一括で生成AIの出力結果（要約・ラベル・キーワード等）を返す設計。[\[42\]\[45\]\[46\]\[47\]\[48\]\[49\]\[41\]](#)

- サポート記事では、月額3万円プランでも「GPT-4o-mini利用時で約2万件/月処理可能」との記載があり、1バッチ1万件×複数回を想定した運用ができることが示唆されています。

[41]

- 高速処理と工数削減

- 解説資料では、最大1万件の特許母集団に対して一括処理し、特許文献の査読時間を「約65%短縮できる」とされています（従来の人手ベースの要約・仕分けと比較）。^[44]
- 具体的な時間（何時間→何分）までは公開されていませんが、「ランドスケープ分析やクリアランス用途で強み」と明記されており、1万件レベルの初期スクリーニングを前提にしたデザインといえます。^{[43][44]}

2. 生成AIモデルごとの扱いと精度の位置づけ

- 利用可能なモデル

- AIRはPatentfield側が用意するOpenAI GPTシリーズや他社LLMのほか、ユーザー自身のAPIキーを利用して、外部LLM（GPT、Claude、Gemini等）を選択する構成が案内されています。^{[45][47][48][49][42][41]}
- これにより、コスト／性能要件に応じて「軽量モデルで大量処理」「高性能モデルで重要サブセット精査」といった運用を切り替えられる前提になっています。^[41]

- 精度差の「公式ベンチマーク」有無

- 現時点で公開されている公式ドキュメントでは、「GPT-4o-mini利用時の月間処理件数（約2万件）」など、主にコスト・処理量に関する指標が示されており、
 - モデルA vs モデルBでの先行技術検出再現率
 - 要約の正答率・ラベル付与のF値といった定量ベンチマーク結果までは開示されていません。^{[44][41]}
- 精度については「通常の検索結果画面にAI査読結果を反映し、公報内容と照合しながら確認できる」「教師データを用いたAI分類予測の性能評価が可能」といった、“ユーザー側で評価・チューニングできる仕組み”が説明されるに留まっています。^[41]

3. 実務での精度検証のヒント（公開情報から読み取れる範囲）

公開情報だけでは、モデル間精度差の具体値までは分からないため、実務者としては以下のような検証設計が必要になります（これは私の提案レベルです）。

- ベースライン設定
 - 特定技術テーマについて、既に人手で分類・要約済みの特許セット（数百～数千件）をベンチマークデータとして用意。
- モデル比較
 - 同一データセットを、GPT-4o-mini、GPT-4クラス、その他選択可能なLLMにそれぞれ投げ、
 - ラベル付与の一致率
 - 重要技術キーワードの抽出漏れ率
 - 誤判定（ノイズ）率を比較。
- スケール検証
 - 上記結果を踏まえ、1万件スケールに拡大した際の「実務上許容できる誤差」と「処理コスト」のバランスを評価する。

4. まとめ（入手できた事実ベース）

- AIRは、最大1万件の特許集合に対して、一括で生成AI要約・ラベル付与・キーワード抽出を行えるオプションであり、月数万件レベルの処理を想定した運用が公式に示されています。^{[42][44]}
^[41]
- 公開情報としては、「1万件バッチでの具体的処理時間」や「LLMごとの精度比較（再現率・適合率など）」の数値は開示されておらず、主に工数削減率（約65%）や大量処理可能であることが強調されています。^[44]

- モデル間の精度差はユーザー側がAPI選択・教師データ評価機能を用いて検証する前提になっており、現状は各社・各組織が自前ベンチマークを回す必要がある、というのが実務的な読みです。[\[43\]](#)[\[44\]](#)[\[41\]](#)

もし社内でベンチを組む前提であれば、「ベンチデータセット設計」と「評価軸（再現率 vs 効率）」の設計案も一緒に考えますので、対象技術領域や件数感を教えてもらえれば、もう少し具体的な検証プロトコル案を書きます。

*
**

知財部がPatSnap Eurekaを導入する際のROI算出の考え方

知財部でPatSnap Eureka導入のROIを考える際は、「工数削減+リスク低減+獲得価値」の3本立てで数値化し、通常のROI式に落とすのが現実的です。[\[51\]](#)[\[52\]](#)[\[53\]](#)[\[54\]](#)[\[55\]](#)

1. 基本式と前提

- 基本式
 - $ROI (\%) = (\text{効果額} - \text{導入コスト}) \div \text{導入コスト} \times 100$ 。[\[56\]](#)
- Eureka前提として置ける事実
 - PatentBenchのベンチで、X文献検出率81%・Xリコール36%と、汎用LLMより大幅に高い性能。[\[52\]](#)[\[53\]](#)[\[55\]](#)
 - 「3日間の作業が3時間に短縮」というレベルの工数削減事例が示されている。[\[55\]](#)[\[51\]](#)
 - PatSnap全体として「IPタスクの生産性75%向上、R&Dの無駄25%削減」をうたっている。[\[54\]](#)

2. 定量効果①：工数削減の金額換算

1. 対象業務を分ける
 - 例：新規性調査、FTO、技術動向調査、他社特許監視など。
2. 現状工数を洗い出す
 - 例：新規性調査1件あたり24時間、年間100件。
3. Eureka導入後の削減率を仮定
 - PatentBenchの「3日→3時間」を保守的に見て「60～70%削減」と置く。^{[51][55]}
4. 金額に変換
 - 削減時間 × 担当者の時給（総人件費ベース）＝年間工数削減額。

例：

- 新規性調査：24h→8h（67%削減）、100件、時給7,000円とすると、
 - 削減時間＝16h×100＝1,600h → 約1,120万円/年の削減ポテンシャル。

3. 定量効果②：リスク低減・権利強化

1. X文献見逃しリスクの低減
 - EurekaはXヒット率81%・Xリコール36%で、汎用LLM（ヒット率32%/リコール11%など）より大幅に優れる。^{[53][52][55]}
2. 評価のしかた
 - 「見逃しによるクレーム補正・権利弱体化・訴訟・ライセンス対応」の平均コストを過去事例からラフに置き、
 - 年間案件数×（Eureka導入で回避できるトラブル発生確率の差）×1案件あたり損失額を「期待損失の削減額」として算出。

例（かなり保守的な置き方）：

- 高リスク案件20件/年、1件あたり平均潜在損失500万円、
- Eurekaで見逃し確率が10%→5%に下がるとすると、

- 年間期待損失削減額 $\approx 20 \times 500 \text{万} \times (0.10 - 0.05) = 500 \text{万円}$ 。

4. 定量効果③：価値創出（案件増・スピード）

1. 出願数・企画提案件数の増分

- 調査時間短縮で、「同じ人員で何件追加で回せるか」を算出。

2. 追加案件からの売上・収益への寄与

- 全部を金額化するのは難しいので、
 - 「知財部がボトルネックで止まっていた案件数」
 - 「先に権利化できたことで優位性を確保した案件」など、社内で意味のあるKPIに限定して仮置きする。

例：

- 追加で年間10件多く有望案件を早期に権利化でき、1件あたり期待NPVが100万円相当と置くと、
 - 年間1,000万円の追加価値。

5. コストとROIの試算フレーム

1. 年間コスト

- ライセンス・導入費・保守・トレーニング・社内運用設計の工数を合算（例：年間500～1,000万円レンジ）。

2. 年間効果額

- 工数削減額＋期待損失削減額＋追加価値（必要に応じて係数をかけて保守的に）。

3. ROI計算

- $ROI = (\text{年間効果額} - \text{年間コスト}) \div \text{年間コスト} \times 100$ 。^[56]
- 併せて「投資回収期間＝導入費÷月次効果額」も計算しておく。^[56]

6. 知財部向けに押さえるべきポイント

- 単なる「時間短縮ツール」ではなく、「X文献検出性能の差」が権利品質・FTOリスクに直結するので、そこを金額換算の中核にする。[\[52\]](#)[\[53\]](#)[\[55\]](#)
- ROI算定時に、
 - 定量：工数削減・期待損失削減・案件増
 - 定性：品質向上、属人性低減、R&Dとの連携強化、知財戦略立案スピードを分けて提示し、経営にはまず定量パートで「ざっくり何%の回収が見込めるか」を示すのが有効です。[\[54\]](#)[\[51\]](#)[\[56\]](#)

もしよければ、「新規性調査〇件/年、FTO〇件/年、平均工数〇時間」といった前提を教えてください。その数字を入れた具体的なROIシミュレーション表を作ります。

*
**

新規性調査は月20件、FTOは月5件、平均工数は1日あたり8時間です

この前提だと、Eureka導入のROIは「かなり出やすい」条件です。以下は、ざっくり置いた仮定での試算イメージです（数字は調整前提）。

1. 前提の整理

- 新規性調査：月20件 → 年240件
- FTO：月5件 → 年60件
- 現状工数（1件あたり）
 - 新規性：1日8時間

- FT0：2日16時間（新規性より重い前提にします）
- 合計工数（現状）
 - 新規性：240件×8h=1,920h/年
 - FT0：60件×16h=960h/年
 - 合計=2,880h/年

Eureka導入後の削減率は、PatentBench事例「3日→3時間」などから、保守的に60%削減と仮定します。^{[61][62][63][64]}

2. 工数削減額（効果①）

- 削減時間
 - $2,880h \times 60\% = 1,728h/年$
- 時給（総人件費込み）を7,000円/hと仮定すると、
 - $1,728h \times 7,000円 \approx 約1,210万円/年$ の工数削減ポテンシャル

3. リスク低減効果（効果②）

Eurekaは、X文献の検出性能で汎用LLMより大幅に優れることがPatentBenchで示されています。^{[63][64]}
^[61]

- 高リスク案件（FT0・重要新規事業）を、全体のうち年20件と仮定
- 1件あたりの潜在損失（補正・係争・ライセンス対応など）を500万円と仮定
- Eureka導入で「重大見逃し確率」が10%→5%に下がると置くと、
 - 期待損失削減額 $\approx 20件 \times 500万円 \times (0.10 - 0.05) = 500万円/年$

これはかなり保守的な置き方ですが、それでも数百万円規模のリスク削減価値になります。

4. 追加価値（効果③）

工数が空くことで、「追加で回せる案件」や「より深い検討」が増える分を、ざっくり金額化します。

- 削減1,728hのうち、半分（864h）を追加案件に再投下すると仮定
- 新規性調査1件8hとすると、追加108件分（ $864 \div 8$ ）の検討が可能
- このうち10件が「将来有望な出願・事業案件」に結びつき、1件あたり期待NPV100万円と置くと、
 - 追加価値 $\simeq 10 \text{件} \times 100 \text{万円} = 1,000 \text{万円/年}$

ここは社内の過去実績に合わせて、もっと保守的（数百万円）にしてもよい部分です。

5. 年間ROIのラフ計算

- 年間効果額（例）
 - 工数削減：1,210万円
 - リスク低減：500万円
 - 追加価値：1,000万円
 - 合計 $\simeq 2,710 \text{万円/年}$
- Eureka関連の年間コストを、導入・教育込みで「800万円/年」と仮に置くと、
 - $\text{ROI} = (2,710 - 800) \div 800 \times 100 \simeq \text{約}240\%$

投資回収期間は、

- $800 \text{万円} \div (2,710 \text{万円} \div 12 \text{か月}) \simeq \text{約}3.5 \text{か月程度}$

もちろんコストと効果の仮定次第で変動しますが、

- 「月 新規性20件+FT05件」レベルのボリューム
- 調査1件あたり丸1～2日かかる前提

であれば、Eurekaクラスの投資でも一年以内の回収が十分に説明できるレンジだと思います。[\[62\]\[64\]\[65\]\[61\]\[63\]](#)

この数字をもう少しリアルにするには、

- 「新規性1件・FT01件あたりの現在の平均時間」
- 「高リスク案件の年件数」
- 「トラブルが起きた時の過去例のコスト感」

あたりを社内ヒアリングして、上の計算枠にそのまま入れていく形が使いやすいです。

*
**

調査1件あたりの平均工数を見直したいから算出式がほしい

調査1件あたりの平均工数は、シンプルには「総工数÷件数」で定義し、そのうえでWBSと3点見積もりを組み合わせると見直しやすいです。[\[76\]\[77\]\[78\]](#)

1. 基本式（集計ベース）

過去実績から出すときの基本式です。

- 総工数（人時）＝各メンバーの作業時間合計（時間）[\[77\]\[76\]](#)
- 平均工数（人時／件）＝総工数（人時）÷調査件数
- 平均工数（人日／件）＝平均工数（人時／件）÷1日の所定時間（例：8時間）

2. タスク分解ベースの式 (WBS)

調査プロセスごとに工数を出して積み上げる方法です。[79][78]

1件あたり平均工数 (人時) =

- 検索式设计時間
- + 検索実行・ノイズ除去時間
- + 先行技術の一次査読時間
- + 詳細検討・比較表作成時間
- + レポート作成・社内説明準備時間

をすべて足し合わせる。

3. 3点見積もり法での式

不確実性を入れて平均値を出したいときの代表的なやり方です。[80][78]

各タスクの工数 (人時) =

(悲観値 + 4 × 最頻値 + 楽観値) ÷ 6

調査1件あたり平均工数 = 上記を全タスク分足し合わせる。

4. 実務での使い方のイメージ

1. 過去3～6か月分の実績から「総工数」と「件数」をとり、基本式でいったん平均工数を出す。
2. 並行してWBSでタスク分解した見積もり値 (3点見積もり) も出し、「実績値」と「理論値」の差を確認する。
3. 差が大きい工程 (例: 一次査読・FT0のクレーム比較など) に対し、Eureka導入後の削減率仮定 (例: △60%) を掛けて、新しい平均工数を算出する。

この枠に「新規性」「FTO」を分けて平均工数式を置けば、そのままROI計算の入力に流用できます。

*

**

1. <https://patentfield.com>
2. <https://yorozuipsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/d9905fd14a10a36f254e.pdf>
3. <https://www.cks.co.jp/home/Products/PatSnapEureka.html>
4. <https://patcore.com/product/patsnap-eureka>
5. <https://media.emuniinc.jp/2025/01/10/ai-patent-search/>
6. https://straightpress.jp/company_news/detail?pr=000000047.000025380
7. <https://mag.osdn.jp/pr/24/07/01/090022>
8. <https://yorozuipsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/ad7a2fe920f586e29ee1.pdf>
9. <https://media.emuniinc.jp/2025/07/23/ai-patent-map/>
10. <https://note.com/kusuura/n/n551027560007>
11. <https://amp.tech-seminar.jp/47199>
12. <https://yorozuipsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/63f52953e95cacefa9c8.pdf>
13. <https://amp.tech-seminar.jp/40318>
14. <https://yorozuipsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/4afa99785f2832c8401c.pdf>
15. <https://www.youtube.com/watch?v=Dky1j7pUZkA>
16. <https://www.cks.co.jp/home/Products/PatSnapEurekaRAndD.html>
17. <https://kyodonewsprwire.jp/release/202512181258>
18. <https://pr.mono.ipros.com/patcore/product/detail/2001172715/>
19. <https://patentfield.com/pricing>

20. <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000047.000025380.html>
21. <https://patentfield.com/news/256>
22. <https://product.patentfield.com>
23. <https://newsrelea.se/B1LbQY>
24. <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000017.000025380.html>
25. <https://yorozuipsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/c28062a5ebd1a56afea4.pdf>
26. https://news.biglobe.ne.jp/economy/0701/prt_240701_7244326742.html
27. https://dx-with.jp/pr_times/142963/
28. <https://note.com/patlabor/n/n886e2323666f>
29. <https://xtech.nikkei.com/atcl/nxt/column/18/00134/051200433/?P=2>
30. https://straightpress.jp/company_news/detail?pr=000000047.000025380
31. <https://patcore.com/blog/pat-bench>
32. <https://idea-triz.com/patsnap/eureka-materials>
33. <https://www.instagram.com/p/DUmB4gvCP-J/>
34. <https://idea-triz.com/column/patsnap-eureka-knowledge-driven-prototyping>
35. <https://support.patentfield.com/portal/ja/kb/articles/料金プラン>
36. <https://yorozuipsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/d9905fd14a10a36f254e.pdf>
37. <https://mag.osdn.jp/pr/24/07/01/090022>
38. https://www.excite.co.jp/news/article/Prtimes_2020-10-20-25380-17/
39. <https://patentfield.com/news/54>
40. https://note.com/voice_chizai/n/nc781fa68c48f
41. <https://support.patentfield.com/portal/ja/kb/articles/patentfield-air-生成ai調査-分析オプション>
42. <https://patentfield.com>

43. <https://yorozuipsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/d9905fd14a10a36f254e.pdf>
44. <https://yorozuipsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/866821f420d78daefcde.pdf>
45. https://straightpress.jp/company_news/detail?pr=000000047.000025380
46. <https://japan.cnet.com/release/30992732/>
47. <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000047.000025380.html>
48. https://news.biglobe.ne.jp/economy/0701/prt_240701_7244326742.html
49. https://dx-with.jp/pr_times/142963/
50. <https://mag.osdn.jp/pr/24/07/01/090022>
51. <https://yorozuipsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/3ea01b2e3b2ce2fd1ffa.pdf>
52. <https://yorozuipsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/2c8725586ec55d2c3c6f.pdf>
53. <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000006.000055070.html>
54. <https://www.jetro.go.jp/biz/areareports/2024/74798653019de35f.html>
55. <https://patcore.com/blog/pat-bench>
56. <https://full-time.info/rpacost-effectiveness/>
57. https://news.biglobe.ne.jp/economy/1030/prt_241030_0554343769.html
58. https://spap.jst.go.jp/investigation/downloads/2024_rr_06.pdf
59. https://www.link-j.org/member_event/article-49950.html
60. <https://idea-triz.com/column/patsnap-eureka-introduction>
61. <https://patcore.com/blog/pat-bench>
62. <https://yorozuipsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/3ea01b2e3b2ce2fd1ffa.pdf>
63. <https://yorozuipsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/2c8725586ec55d2c3c6f.pdf>
64. <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000006.000055070.html>
65. <https://www.jetro.go.jp/biz/areareports/2024/74798653019de35f.html>

66. <https://yorozuipsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/42d68feecc44aeelc758.pdf>
67. <https://www.mhlw.go.jp/content/11800000/000701114.pdf>
68. <http://www.jatco.co.jp/wp-jatco/wp-content/themes/JATCO/assets/document/review/4/JTR04.pdf>
69. https://career.nikkei.com/kyujin/ss_12/mrt_15/pg1/
70. <https://www.nittoc.co.jp/wp-content/uploads/2025/11/e0590087892510200754-1-1.pdf>
71. https://static.horiba.com/fileadmin/Horiba/Company/About_HORIBA/Readout/JA/R40J/Readout40J.pdf
72. <https://www.instagram.com/p/DQ8APixEldP/>
73. https://www.cas.go.jp/jp/seisakukaigi/titeki2/chitekizaisan2026/pdf/shiryo2026_2.pdf
74. https://cont.o.oo7.jp/42_2/p241-394.pdf
75. <https://www.jpo.go.jp/support/general/document/chizai-jobobunseki-report/chizai-jobobunseki-report.pdf>
76. https://www.fdc-inc.co.jp/fapi/man-hour_calculation/
77. <https://www.kaonavi.jp/dictionary/kosu/>
78. https://www.teamspirit.com/column/mm_mitsumori
79. <https://procan.co.jp/column/250827-14/>
80. <https://biz.moneyforward.com/erp/basic/6212/>
81. https://www.zai-keicho.or.jp/data/pdf/software/EIRR_vol_11.pdf
82. <https://qiita.com/wannabehime/items/d82cae8a38991bf6c00e>
83. <https://zenn.dev/rh820/articles/7dad8a2c6627d7>
84. <https://smartf-nexta.com/archives/2683>
85. <https://backlog.com/ja/blog/commentary-from-the-basic-meaning-of-the-man-days-and-man-month-to-the-calculation-method/>